

## 2. 中四国地域における縄文時代精神文化について

### — 大型石棒・刀剣形石製品を中心に —

中村 豊

#### はじめに

本州島西部および四国島（以下中四国地域）は、元々縄文時代の資料自体あまり多くない。近年の資料蓄積によって、ようやく精神文化関連資料についても、ある程度の様相をうかがうことが可能となりつつある。これは、中四国地域の中では縄文時代資料の豊富である山陰地域においても認めることができる。これらを駆使した諸研究がおこなわれる背景が存在する上、すでに、2011年に中四国縄文研究会において、精神文化関連資料は中心テーマとして取り上げられたこともあって、山陰地域をフィールドとする当該研究は蓄積されている（中四国縄文研究会2011）。ここでは、視野を中四国地域まで広げた上でその展開を概観し、山陰地域の精神文化資料と関連の深いテーマについてとりあげていきたいと思う。

前半部分で、中四国地域における精神文化関連資料に関する資料に関して、研究動向に言及しつつ、全体的な概観をおこなう。後半部分では、筆者が1998年以降、縄文／弥生移行期を中心とする結晶片岩製大型石棒（以下結晶片岩製石棒）の研究を重ねてきた（中村1998、2001、2005、2007等）経緯をふまえて、結晶片岩製石棒の展開とその山陰地域への波及、山陰地域で独自の展開をみせる角柱状大型石棒（以下角柱状石棒）に言及する。その上で、縄文／弥生移行期の地域社会の展開について概観したい。

### 1. 中四国地域における縄文時代精神文化関連資料の概観

#### (1) 縄文草創期～中期

##### 線刻礫

愛媛県上浮穴郡久万高原町上黒岩岩陰遺跡出土の線刻礫は、学史上著名な資料である。線刻礫は縄文後晩期の遺跡でも散見しえるが、縄文草創期の類例は上黒岩岩陰遺跡をのぞいてみられない。今後の比較資料の蓄積に期待したい（註1）。

##### 玦状耳飾

縄文前期～中期前葉の精神文化関連資料としては、玦状耳飾をあげることができる。破損（意図的な切断の可能性もある。）後に穿孔をほどこし、垂飾として再加工するものが特徴的である。山陰地域では、米子市目久美遺跡、松江市サルガ鼻洞窟遺跡、同佐太講武貝塚、雲南市家の後Ⅱ遺跡、島根県飯石郡飯南町板屋Ⅲ遺跡、益田市中ノ坪遺跡、宇部市月崎遺跡、広島県神石郡神石高原町帝釈穴神岩陰遺跡、倉敷市里木貝塚、同磯の森貝塚、四国地域では、徳島県海部郡美波町田井遺跡において、玦状耳飾が9点まとまって出土している。宿毛市宿毛貝塚、高知県長岡郡本山町松ノ木遺跡などでも出土している。

玦状耳飾は、沿岸部・内陸部を問わず分布している。また、形態には共通性がみられ、石材も蛇紋岩製のものが広くみられる。さらに、これを模倣したとみられる在地産石材のものも認められる。この時期の遺跡は決して多くはなく、また規模も大きくない。しかし、すでに金山産サヌカイトなど石材が広域に普及するようになっており、玦状耳飾のような非実用品も、当時の交易網に一定の役割を果たしたことがかんがえられる。

##### 配石遺構

すでに縄文早期以降、野外炉としての集石遺構は認められる。一方、精神文化に関連する「配石遺構」としては、縄文早期における米子市上福万遺跡が特筆すべき類例であろう。上福万遺跡では35基の配石遺構が検出されている。拳大～人頭大の礫をもちいて配石をおこなう。もっとも規模の大きいもので径

8 mをはかる。集石下に土坑をともなうものもみられ、これらは配石墓とかんがえられている。

庄原市久代東山岩陰遺跡では、縄文前期前半の配石遺構がみつまっている。南北10m、東西4 m程度の範囲に、敷石・立石・石列・礫群が集中して分布している。立石は、長さ66.5cm、幅30cm、厚さ15cmの洋梨形をした石からなっており、二つの小型の石に支えられるように検出された。径65cmほどの土坑に立てられていたようである。敷石は、東西1.6m、南北1.7mの三角形状に石を敷き詰めて形成されている。径20～40cm程度の石から形成されている。石列は、径15～35cm程度の扁平な石12個が長さ2 mにわたって検出された。礫群は火をうけたものもみられ、調理・解体の機能をもつものであろう。

中ノ坪遺跡においても、縄文前期の配石・立石をともなう土坑群が検出されている。そのうち、SK26からは、珧状耳飾が出土している。

今治市江口貝塚では、縄文中期前半の例をみることができる。江口貝塚の配石遺構は、縄文後期以降のものとは異なって、群集せずに孤立しており、規模も大きくない。貝輪を1点ともなっている。

以上の縄文前半期の類例が、縄文後晩期の配石遺構の系譜となるものであるかは、中期前半の類例に乏しいため、あきらかではない。

## (2) 縄文後晩期

縄文後晩期になると、列島西部の他地域と同様遺跡数が増加する。これにともなって、精神文化に関連する資料も増加する。同一地点に数型式間継続して、やや規模の大きい遺跡を形成する例がみられるようになる。このような遺跡が、大型石棒をはじめとする呪術具をもちいた儀礼をおこなうことによって、地域社会を結びつけていたと推察される。また、このような遺跡では、大型の石材など遠隔地からの物資が多く出土する傾向がみられる点も見逃せない。石棒を切り口に、この点を指摘した稲田陽介(2009)の研究は注目される。

### 配石遺構・配石墓

中四国地域の縄文後晩期に特徴的な精神文化関連遺構として、山間部を中心に配石遺構が認められる点をあげておきたい。とくに島根県域に良好な類例が多く認められ、四国山地などにおいても散見することができる。

縄文中期末～後期初頭では、鳥取県八頭郡智頭町智頭枕田遺跡や、益田市前田中遺跡、島根県飯石郡飯南町下山遺跡などの類例がみられる。縄文後期中葉～後葉では、益田市ヨレ遺跡、同水田ノ上遺跡、下山遺跡、高知県長岡郡本山町松ノ木遺跡、愛媛県北宇和郡鬼北町岩谷遺跡、同上浮穴郡久万高原町山神遺跡、四万十市大宮・宮崎遺跡などの類例がある。縄文晩期では智頭枕田遺跡、倉吉市松ヶ坪遺跡、島根県仁多郡奥出雲町原田遺跡、同下鴨倉遺跡、板屋Ⅲ遺跡、徳島県三好郡東みよし町稲持遺跡、愛媛県伊予郡砥部町長田遺跡など、多くの類例をみることができる。

縄文中期末～後期前葉の類例は、あまり規模は大きくなく、また住居跡に近接して営まれる傾向がみられるのに対し、縄文後期中葉以降は居住域から独立し、やや規模を大きくする類例をみることができる。水田ノ上遺跡や原田遺跡、大宮・宮崎遺跡などがこれに相当しよう。

縄文晩期前半のものともみられる長田遺跡では、配石遺構とともに、石棺墓状に配石をおこなった土坑墓が14基検出されている。石棺墓は、縄文晩期の列島東部では多数認められるが、長田遺跡のように群集する例は、現時点での列島西部では比較資料がない。

こんにちまでほとんど注目されることはなかったが、配石遺構(墓)は、弥生時代にも受け継がれた可能性がある。島根県邑智郡美郷町沖丈遺跡、阿波市日吉谷遺跡、同桜ノ岡遺跡、同北原遺跡など、縄文時代の配石遺構(墓)に酷似した遺構が検出されている。弥生前期の遺跡は、沖積平野において検出される例が多く、河岸段丘など、配石遺構の多く認められる遺跡立地とは重ならない傾向が強い。そのため、現時点で、弥生前期の配石遺の類例がみとめられないこともあって、これら遺構の系譜については、従来ほとんど取り上げられることがなかった。

以上、配石遺構の評価については、近年の幡中光輔(2011a・b)による研究に詳しいので、参照さ

りたい。

### 土器埋設遺構・土器棺墓

土器埋設遺構や土器棺墓は、中四国地域で対照的な分布状況を示している。中国地域では、縄文後期初頭～前葉すでに類例を認めることができる。仁多郡奥出雲町暮地遺跡、雲南市三刀屋町宮田遺跡では、2基の土器埋設遺構が検出され、いずれも倒置されているという特徴を有していた。

縄文後期後葉～晩期の代表例は、原田遺跡例の12基、雲南市北原本郷遺跡例の5基、家の後Ⅱ遺跡例の5基であろう。いずれも縄文後晩期にわたるが、縄文晩期中葉の原田式期にもっとも盛行する共通性をもつ。幡中光輔は、縄文晩期中葉のこのあり方を、居住地が移動した場合も、墓域は定着していた可能性を指摘している。ほかに、松ヶ坪遺跡、岡山県苫野郡鏡野町久田堀ノ内遺跡などに類例を認めることができる。

四国地域においては、従来土器埋設遺構・土器棺墓自体あまりみられなかった。しかし、近年その類例が認められつつある。新居浜市上郷遺跡で凸帯文期前半期、徳島市観音寺遺跡で縄文晩期初頭の類例がみられた。近年は松山市北井門遺跡などでも縄文晩期前半の類例がみつまっている。いずれも、関西～東海・北陸西部地域でみられるように、群集するような傾向はみられない。

### 玉類

山陰地域では、ヨレ遺跡、水田ノ上遺跡など西部地域のほか、原田遺跡などでもその類例を確認することができる。四国地域では、土佐市上ノ村遺跡や高知市柳田遺跡、稲持遺跡、阿南市深瀬遺跡など、縄文後期後葉～晩期中葉ごろの資料が蓄積されつつある。縄文晩期前半には九州系の玉類が多く、糸魚川産も認めることができる。

### 土偶・土製品

山陰地域において、比較的豊富な資料を駆使し土偶研究が進展している。深田浩（2002、2010）の研究がその代表例である。一方四国地域では、土偶の出土例自体少ないという特徴をもっている。

縄文後期以前の類例はほとんどみられない。縄文後期前葉に、山陰地域を中心に分銅形土偶が展開する。北原本郷遺跡、暮地遺跡、林原遺跡、下山遺跡などで出土する。分銅形土偶はその後も展開するが、縄文後期中葉には人形土偶が波及し展開するようになる。下山遺跡の屈折像土偶が特に特徴的である。縄文後期後葉～晩期は、分銅形土偶が山陰西部地域で、人形土偶が同東部地域で展開するが、両者が共伴することはない（深田2010）。

徳島市矢野遺跡では縄文中期末・後期初頭の土面が出土しており、特徴的な資料となっている。

## 2. 中四国地域における大型石棒および刀剣形石製品の展開

### (1) 大型石棒と刀剣形石製品の展開概観

近年、中四国地域では大型石棒の類例が、着実に増加しつつある。これまでに、小林青樹、濱田竜彦、筆者、稲田陽介による研究の蓄積がみられる。山陰地域では、すでに稲田（2008）による詳細な研究がある。本稿ではこれら先行研究を参考に、中四国全域からその展開と地域性を概観し、次章では、地域社会における役割を考察していきたい。

大型石棒は、縄文中期末・後期初頭～後期前葉にかけて、列島東部より中四国地域にもたらされたとかんがえられる。縄文中期末には、多くの文物がセットとなって列島東部から列島西部へと展開する。土偶・石棒などもそのひとつである。縄文中期末～後期前半の資料としては、山陰地域では鳥取市栗谷遺跡や鳥取県東伯郡北栄町島遺跡、松江市夫手遺跡、大田市中尾Ⅱ遺跡例（写真3-24）などをあげることができる。松江市九日田遺跡や島根県飯石郡飯南町中原遺跡（図1-1）、島根県仁多郡奥出雲町寺宇根遺跡、益田市石ヶ坪遺跡、島根県鹿足郡津和野町大蔭遺跡例（砂岩製のもの、図1-2）なども、その可能性が高い。石材は、砂岩、凝灰岩、安山岩、緑色片岩など多様である。山陽地域は好例を欠いている。

四国地域では、矢野遺跡で6点出土し、徳島県美馬郡つるぎ町貞光前田遺跡（図1-3）や、善通寺

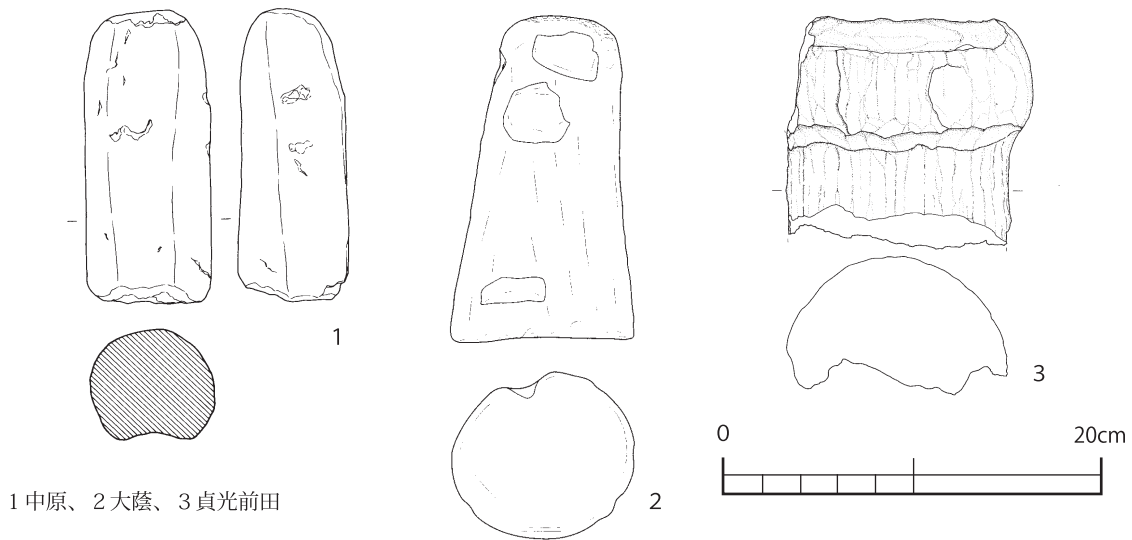


図1 中四国地域出土大型石棒（縄文後期前葉）

市中村遺跡においても類例が認められる。石材はすべて結晶片岩であるが、南国市田村遺跡にみられる砂岩製も、この時期の可能性が高い。

中国地域は石材が多様である。四国地域は結晶片岩に偏っているが、これは四国山地自体が結晶片岩地帯だからである。田村遺跡例のように、四国山地の南側には砂岩製や緑色岩製のものが認められる。ここでは、縄文後期前半に展開する大型石棒は、各地の多様な石材をもちいていることを確認しておきたい。

縄文後期中葉～晩期中葉にかけては、中四国地域において、対称的な展開をみせるようになる。中国地域では、大型石棒があまりみられなくなり、刀剣形石製品が普及する。

原田遺跡では、石棒・刀剣形石製品が計20点以上出土している。4点ほどみられる結晶片岩製の粗製大型石棒の破片（図3-2、写真2-8～11）は、他遺跡との比較からみて縄文晩期後葉の土器にともなう可能性が高く、残りの半精製・精製の中型～小型の石棒（図2-1、写真3-10）・石刀が、原田遺跡の主体である縄文晩期前葉～中葉に属するものであろう。確実な未製品は確認できなかったが、他地域ではあまりみかけない石材もみられ、この地域において生産されたものとかんがえられる。石材は頁岩、安山岩、緑色片岩系などがみられ、多様である。島根県飯石郡飯南町森Ⅲ遺跡出土の砂岩製小型石棒も、縄文後期後葉～晩期前葉のものであろう。同森Ⅰ遺跡出土石棒は、2点とも片岩製ではあるが、うち残存のよい1点が縄文後期後葉～晩期前葉に属する小型～中型のもので、小破片（図3-1、写真2-9）は縄文晩期後葉の結晶片岩製石棒である可能性が高い。沖丈遺跡例は、縄文後期後葉ごろの小型石棒であろう。大蔭遺跡出土の小型石棒（図2-6）も縄文後期後葉～晩期前葉のものであろう。

山陽地域では、山口県熊毛郡平生町岩田遺跡や庄原市帝釈寄倉岩陰遺跡（図2-5）、倉敷市舟津原遺跡、岡山県苫田郡鏡野町久田原遺跡例（図2-2・3、写真3-25・26）などがある。いずれも縄文後期後葉から縄文晩期前葉のものであろう。石材は多様である。岡山県の類例は、関西地域にみられる櫃原型石刀が多い。帝釈寄倉岩陰例は、縄文後期後葉のもので列島東部中心に分布する成興野型石剣の搬入品である。

一方四国地域ではこの時期の刀剣形石製品自体あまり多くみられない。四万十市中村貝塚（図2-4）や稲持遺跡、徳島県海部郡海陽町大里浜崎採集例を数えるくらいである。一方縄文後期後葉の大宮・宮崎遺跡や徳島市庄遺跡、縄文晩期中葉の西条市池の内遺跡では、結晶片岩製の大型石棒が出土している。四国地域では、縄文後期中葉以降も刀剣形石製品の普及があまり浸透せずに、大型石棒祭祀を継続していった様相が伺える。

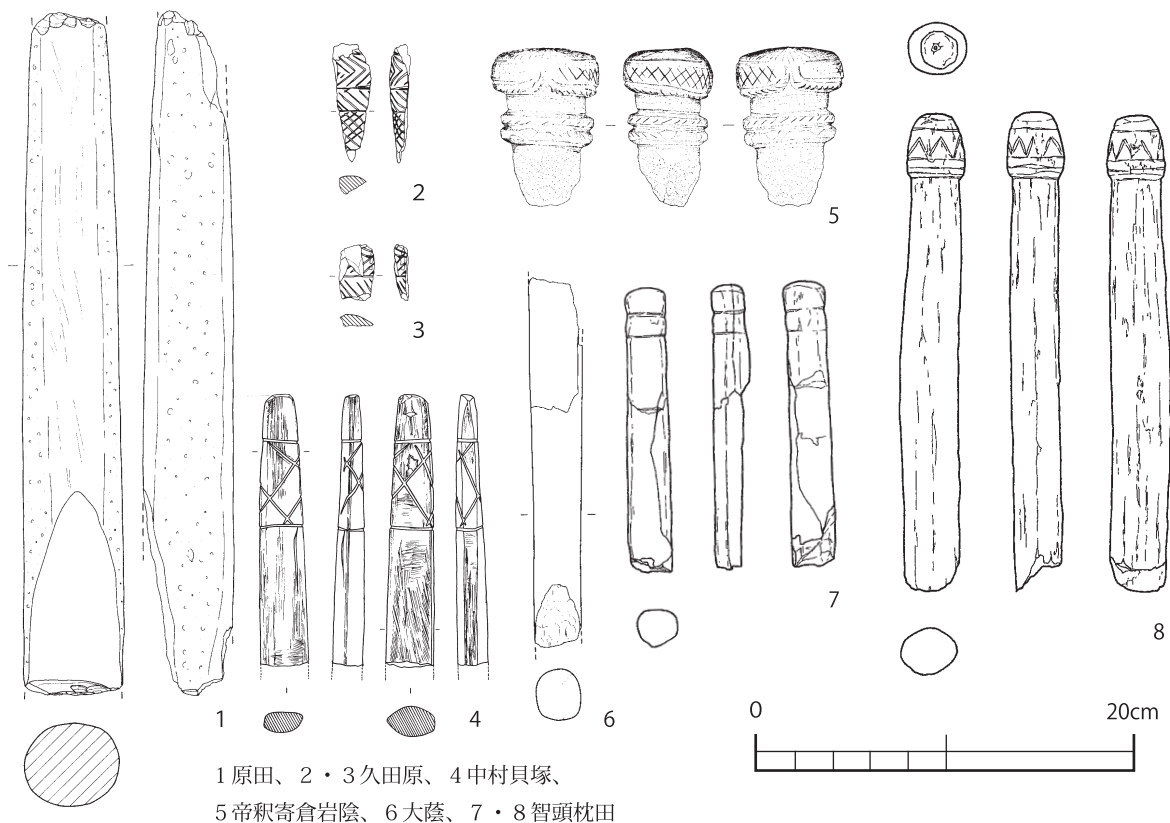


図2 中四国地域出土刀剣形石製品（半精製石棒含む、縄文後期後葉～縄文晩期中葉）

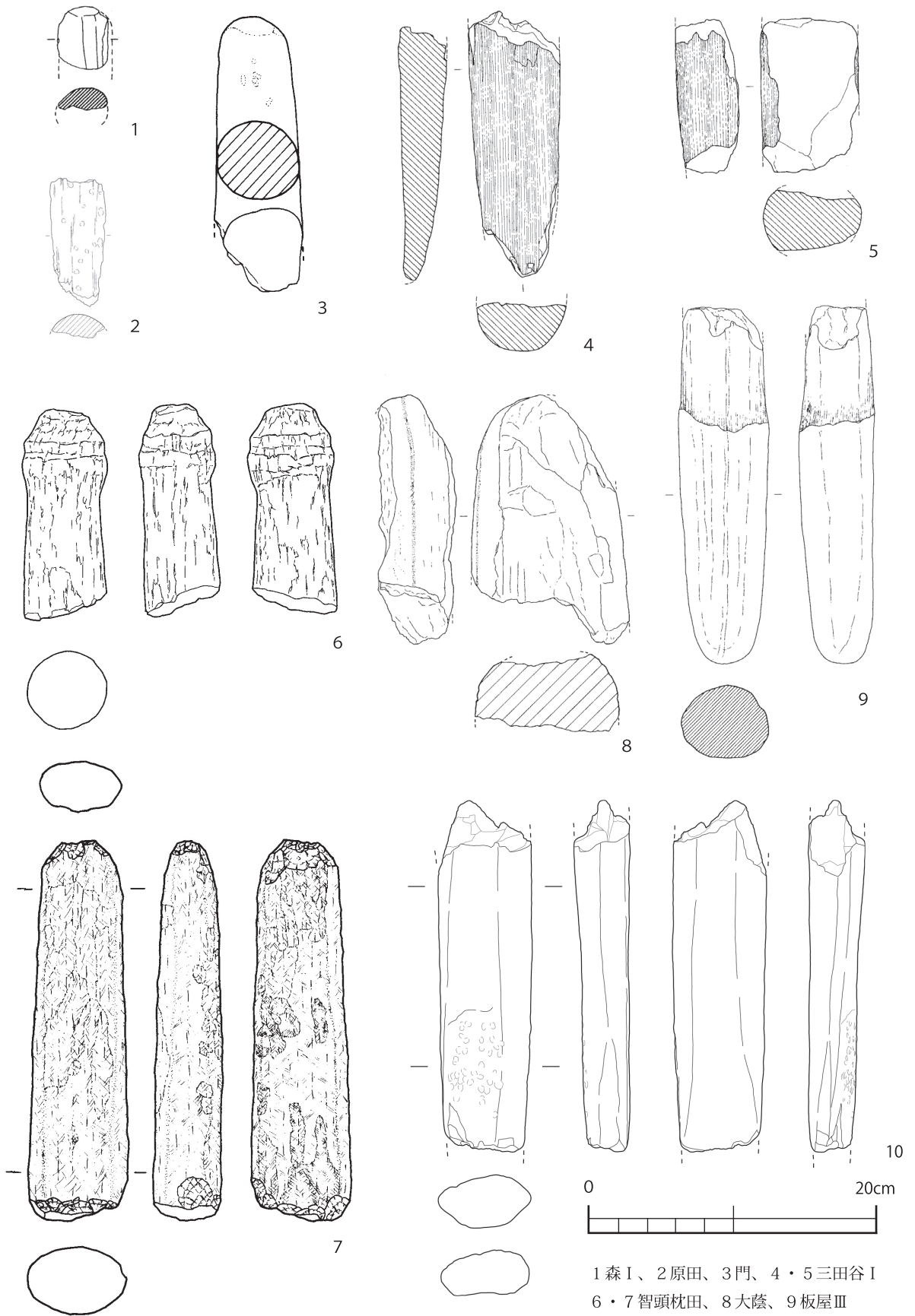
石材利用は、縄文後期前葉と同じく四国地域では結晶片岩に偏りをみせるが、多様なものをもちているとみてよいだろう。

縄文晩期後葉～末、すなわち縄文／弥生移行期に、ふたたび大型石棒が盛行する。山陰地域では、大蔭遺跡（図3－8、写真2－12）、出雲市三田谷Ⅰ遺跡（図3－4・5、写真2－1・2）、森Ⅰ遺跡（図3－1、写真2－9）、原田遺跡（図3－2、写真2－8～11）、板屋Ⅲ遺跡（図3－9、写真2－7、写真3－11）、同門遺跡（図3－3、写真2－3）、智頭枕田遺跡（図3－6・7、写真2－4・5）、鳥取市本高弓ノ木遺跡（図3－10）において確認できる。山陽地域では、岡山市百間川沢田遺跡（写真3－7・8）、同津島岡大遺跡（写真3－2）、瀬戸内市門田貝塚（写真3－6）などで確認でき、広島県域では、現時点で発掘調査において土器と共伴する形での出土は確認できないものの、採集・伝世品がある程度報告されているので、本来存在していたとかがえてもよいだろう。一方山口県域では現時点での出土が確認できない。

四国地域では、徳島市三谷遺跡（写真1、写真3－3～5）のほか徳島市名東遺跡、同市上中筋遺跡、徳島県三好郡東みよし町大柿遺跡、高松市東中筋遺跡、同井手東Ⅱ遺跡、今治市中寺州尾遺跡、同阿方遺跡（報文では敲石）、上郷遺跡、松山市船ヶ谷遺跡、北井門遺跡、同市道後今市遺跡、土佐市居徳遺跡などで出土している。

この時期の大きな特徴は、石材が一部で地元産のものもみられるが、結晶片岩製のものに偏りをみせるというところにある。三田谷Ⅰ遺跡例（図3－4・5、写真2－1・2）では原産地の検討もおこなわれ、四国三波川帯産と推定されている（註2）。結晶片岩自体は中国山地でも産出するが、縄文晩期後葉に特徴的な結晶片岩は、四国山地に多くみられる高変成度のものを特徴としており、中国山地ではみられないものである（高須2000）。

なかでも徳島市三谷遺跡では未製品（写真3－5）や大型の個体がまとまって出土し、出土点数自体も飛び抜けて多い。当該期の結晶片岩製石棒のうち、かなりのものはここで生産され、伝播していった



1 森1、2 原田、3 門、4・5 三田谷 I  
 6・7 智頭枕田、8 大蔭、9 板屋Ⅲ  
 10 本高弓ノ木

図3 山陰地域出土結晶片岩製石棒（縄文晩期後葉）

ものとかんがえられる。まず海を介して、大阪湾や紀伊水道沿岸諸地域を含む瀬戸内海沿岸地域に波及したと考えられる。一方、山陰地域の結晶片岩製石棒は、津和野・奥出雲・飯南・智頭といった内陸部での出土例が多い。山口県の沿岸部の遺跡でみられないことからみて、これらは中国山地を介して伝えられていったことを示唆している。

縄文晩期後葉、広く波及する結晶片岩製石棒であるが、同時に在地の石材をもちい、地域的な展開をみせる大型石棒も、決して多くはないが、見出すことができる。

山陰地域を中心に、角柱状の大型石棒が展開する(図4、写真3-12~14・21)。いずれもベージュ~灰色を呈する凝灰岩質ないし安山岩系の石材を利用している。一見石棒未製品や石杵にも見受けられるが、米子市青木遺跡(図4-1、写真3-13)に沈線を施した例がみられるので、角柱状で石棒としての機能をはたしていたとかんがえてよかろう。

青木遺跡では、2条の沈線を施したものがみつまっている。沈線の上下にも強い研磨を加えて、3条の浮線状に仕上げる(図4-1、写真3-13)。出雲市蔵小路西遺跡例は、端部に石杵状の擦痕を認めることができる(図4-2、写真3-12)。ほかにも米子市長砂第4遺跡(図4-3、写真3-14)や本高弓ノ木遺跡(図4-4)、智頭枕田遺跡(写真3-21)でみつまっている。

高知県域では、地元産緑色岩をもちいた大型石棒をみることが出来る。居徳遺跡(写真3-15)や高知市仁ノ遺跡(写真3-22・23)、田村遺跡に類例がある。居徳遺跡では結晶片岩製のものもみられる。これらは結晶片岩製石棒を模倣したものと思われる。

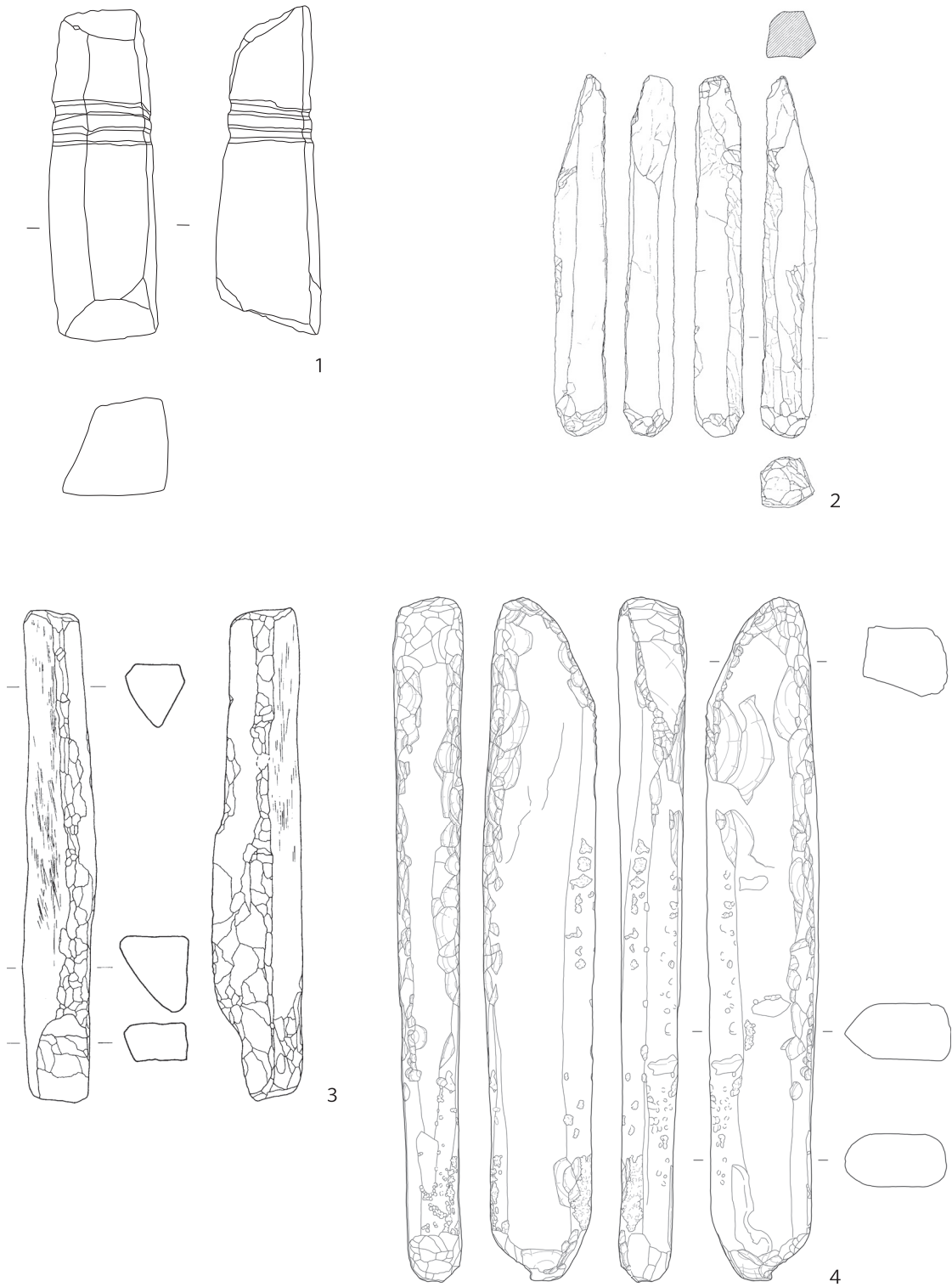
以上のほか、例外として、智頭枕田遺跡出土の刀剣形石製品をあげることができる(図2-7・8、写真3-18~20)。智頭枕田遺跡は、縄文晩期末の土器が多量に出土しているので、刀剣形石製品もこの時期に属する可能性が高い。しかし、中四国地域における刀剣形石製品の大半は、縄文後期中葉~晩期中葉の土器にともなう例であって、縄文晩期後葉の土器にともなう例はほかに確認されていない。智頭枕田遺跡では少量ながら縄文後期中葉の土器も出土しており、これにともなう可能性がかんがえられるのと、刀剣形石製品が浮線網状文土器など列島東部系土器とともに搬入された可能性も想定できる(註3)。

筆者はかつて、大型石棒と刀剣形石製品が別系統の資料であること自体は認識していた(中村2005)が、関西・中国・九州諸地域において、縄文後期中葉~晩期中葉にかけて大型石棒が衰退し、刀剣形石製品が盛行する動向を受けて、四国地域においても同時期、刀剣形石製品がおもに展開するとかんがえた(中村2000a・b・2003)。しかし、刀剣形石製品の出土例自体、四国地域では貧弱で、縄文後期中葉~晩期中葉においても大型石棒は健在である。大宮・宮崎遺跡出土の縄文後期中葉の例や庄遺跡出土の縄文後期末の例、池の内遺跡で縄文後期中葉の土坑にともなって出土した例などからみて、四国地域では、この時期も継続的に大型石棒が展開していたとみるべきであろう(註4)。縄文晩期後葉に四国産結晶片岩製石棒が広く波及する背景には、四国地域において縄文中期末・後期初頭以後も継続的に大型石棒が使用された点をあげることができる。山陰地域で角柱状石棒が展開し、南四国地域で緑色岩製大型石棒(以下緑色岩製石棒)が展開するようになるのは、結晶片岩製石棒の波及を受けたか、これらの地域それぞれにおいて、ほぼおなじころに、大型石棒を必要とする歴史的背景、すなわち地域社会の維持を必要とするような局面が生じたからであろう。その背景には、灌漑水田稲作導入にともなう協業の発生と集住化に対し、石棒祭祀を通じた従来型の地域社会を維持しようとした動きを読み取ることができるのではあるまいか。

## (2) 中四国地域における石棒石材・生産・消費

大型石棒・刀剣形石製品の石材は、中国地域と四国地域で大きく異なっている。中国地域は多様な石材をもちいている。これは、中国地域内の複数の遺跡で、それぞれ地元産石材製の石棒が生産され、流通圏が重なり合っていたからではないだろうか。一方四国地域は大半が結晶片岩である。

これは四国山地の大半が結晶片岩地帯で、この石材が加工しやすいからであろう。一方、小数ながら、



1 青木、2 蔵小路西、3 長砂第4、  
4 本高弓ノ木

0 20cm

图4 山陰地域出土角柱状石棒（縄文晩期後葉）



南四国地域では砂岩製や緑色岩製のものがみられる。また、素材や未製品など製作工程を示すような資料は、縄文晩期末の三谷遺跡などをのぞいてほとんどみつかっていない。これは、あらかじめ石棒の形態に近く、複雑な製作工程を必要としない川原石を素材とし、また特定の遺跡で集中生産するのではなく、各地域社会において、その生産から使用が完結するか、比較的小規模な流通にとどまっていたからであるとかんがえられる。

中四国地域でのこうした様相は、基本的には縄文晩期後葉にも継続したとかんがえられる。山陰地域の角柱状石棒（図4、写真3-12~14）や、南四国地域の緑色岩製大型石棒（写真3-15・22・23）がこれに相当しよう。愛媛地域の結晶片岩製石棒にも、その可能性はかんがえられる。一方四国東部地域の三谷遺跡では製作工程を復原できる豊富な資料が出土している（写真1、写真3-2~4）。名東遺跡、大柿遺跡でも未製品がみられる。すなわち、ある程度の集中的な生産が想定できる。これは、消費先の需要とも密接に関わり合うものである。

結晶片岩製石棒は、この時期の中四国地域だけではなく関西地域にも波及していることが知られている。大阪湾沿岸～紀伊水道沿岸地域（大阪・兵庫・和歌山諸県域）では、多くの類例が蓄積されている。また内陸の奈良（橿原市橿原遺跡、大和高田市川西根成柿遺跡、御所市中西遺跡など）・京都（京都市高倉宮下層遺跡）・滋賀（大津市滋賀里遺跡、高島市北仰西海道遺跡、米原市磯山城遺跡）でも多くの類例が報告されている（図5）。

列島西部で、特定石材の石棒がこれだけの分布圏をもち、かつ石棒祭祀がこれだけ盛行したのは、縄文晩期末だけである（図5）。しかも、同時代の日本列島で、もっとも多くの石棒がもちいられたのである（註5）。

### 3. 石棒からみた地域社会

#### (1) 大型石棒・刀剣形石製品の出土状況

縄文後期中葉～縄文／弥生移行期を通して、中四国地域を含む列島西部諸地域において、大型石棒は遺物包含層などから単品で出土するケースがほとんどであるが、なかには遺構や墓域付近からの出土例を確認することができる。たとえば、縄文後期中葉の大宮・宮崎遺跡では、第11・12号配石遺構から計1点出土している。縄文晩期中葉の池の内遺跡では、SK39・SP146の2か所の土坑から1点ずつ出土している。

縄文晩期後葉の上郷遺跡や徳島県三好郡東みよし町土井遺跡でも、土坑から石棒1点が出土している。同じく縄文晩期後葉の板屋Ⅲ遺跡や門遺跡例は、墓域からの出土であり、埋葬儀礼との関わりがかんがえられるものである。智頭枕田遺跡例も、配石遺構との関連性が指摘されている。

同じ縄文晩期後葉では、西条市長網Ⅰ遺跡、阿方遺跡などで、土坑からの出土がみられる。また、松山市別府遺跡や東中筋遺跡、井出東Ⅱ遺跡、本高弓ノ木遺跡、津島岡大遺跡のように、自然流路や旧河道から出土するケースもみられる。基本的には、1遺跡から1～2点完形品に近い形で出土するケースが多い。

縄文晩期後葉になると、1・2点が出土するケースに加えて、4点以上、遺跡によっては20点をこえるものが出土する類例がみられるようになる。

縄文晩期後葉の三谷遺跡、名東遺跡などは、上記1～2点出土の遺跡とは異なった出土状況をみせる。すなわち、三谷遺跡は貝層の堆積する自然凹地（7体のイヌの埋葬がみられる）から18点以上（写真1、写真3-2~4。未公表資料や、戦前出土し散逸したものを含めると、30点ほどになる。）の石棒が出土している（第4図）。また、名東遺跡でも自然凹地から4点が出土している。大柿遺跡でも6点が出土する。さらに、無頭形が多い縄文晩期中葉までとは異なり、確実に有頭形が認められるようになる。たとえば、三谷遺跡では、18点中3点の有頭形である（写真3-4）。

これと同様4点以上の石棒が出土する類例は、結晶片岩製石棒の消費先である中国・関西地域でも認められる。智頭枕田遺跡、大阪市長原遺跡、伊丹市口酒井遺跡、神戸市大開遺跡、東大阪市弓削ノ庄遺

跡、和歌山県日高郡みなべ町徳蔵地区遺跡、同県西牟婁郡すさみ町立野遺跡、大和高田市川西根成柿遺跡のように、4・5点～20点程度まとまって出土するケースがみられる。そして、これらの遺跡には、有頭形が含まれる場合が多い。

縄文晩期後葉における大型石棒の盛行は、直接的な系譜は縄文後期中葉～晩期前半に、四国地域に展開する大型石棒にあるとみられる。しかし、結晶片岩という同一石材のものが、以前みられたような多様な石材をもちいた諸地域の枠をこえた遠隔地にいたるまで展開することや、特定の遺跡で多量に出土するようなケースがみられるようなこと、型式学的には有頭形のものが増加することなどは、あきらかにそれ以前とは異なる意味をもつものである。

さらに、列島東部に分布の中心があった石棒が、関西～中四国地域において同時代の列島でもっとも盛行する歴史的背景はどのようにとらえるべきものであろうか（図5）。

このころ、中四国東部地域で盛行する大型石棒に対し、九州北部～四国西部地域を中心に大陸系の精神文化がもたらされる。その代表的な遺物は、有柄式磨製石剣である（図5、下條1994、武末1982）。有柄式磨製石剣は、松山平野や田村遺跡、高松市庵治町沖の海底（図6—1）などで出土している。分布状況は四国西部地域に偏りをみせている。一部分布域は重なりつつも、中四国東部地域に分布する大型石棒と好対照をなしている（図5、中村2004・2005）。中国地域ではいまのところみられないが、西部地域へと伝播してきた新たな精神文化との出会いが、東部地域における伝統的な精神文化の盛行を促したものとかがえられる（中村1998・2000b・2001・2004・2005・2007・2008・2009・2010）。そうして、有頭形の大型石棒や大洞系土器、漆工芸・赤彩・木工技術などの流入にみる、列島東部地域との交流が活発化するあり方も、このような動向と連動するものではなかろうか。浮線文土器の分布は、概ね大型石棒が盛行する地域と重なるのである。

なお、似たような類例が、山陰地域縄文晩期中葉の原田遺跡にもみることができる。同遺跡では、20点ほどの刀剣形石製品と中型の半精製石棒がまとまって出土している。

稲田陽介（2008・2009）はこれを、周辺の遺跡を結びつける中心的な集落を示すものと評価する。原田遺跡の特徴は、土器埋設遺構や配石遺構がみられるところにあるといえる。これら精神文化関連遺構や石棒類を使用した祭祀を通して、周辺の小規模集落がむすびついて、ひとつの地域社会を形成していたともかがえられる。

原田遺跡出土の石棒類のうち、3～4点結晶片岩製大型石棒がみられる。原田遺跡では、縄文晩期後葉の土器も出土しており、これらは中四国地域のほかの遺跡との比較から縄文晩期後葉とみるべきであろう。石棒類の所属時期決定は慎重におこなわなければならないが、それでもなお、刀剣形石製品の盛行する縄文後期～晩期中葉を通して原田遺跡の出土数は飛び抜けており、この遺跡を縄文晩期中葉地域社会の核となるべき集落と評価するのは妥当であるとかんがえられる。

## (2) 地域社会の変容と大型石棒の終焉

筆者はこれまで、結晶片岩製大型石棒の出土相から、縄文晩期末～弥生前期初頭の地域社会の動向について論じてきた（中村2007・2008・2009・2012・2013）が、ここでは、縄文後期からの展開を含めて概観していきたい。

大型石棒の出土する遺跡は、下記のように、大きくみて3つの類型に分類することが可能である（中村2009を修正）。

- A：1遺跡から1～3点程度の石棒が出土する。土坑や流路、配石など、遺構から出土することもあるが、1・2点の出土にとどまる。大宮・宮崎遺跡、庄遺跡、池の内遺跡など、縄文晩期中葉以前は、大半がこの類型に属する。縄文晩期後葉にも、同様の類例は継続する。
- B：1遺跡から4・5～20点程度のまとまりをもって出土する。縄文晩期後葉の東部地域に特徴的な類型である。三谷遺跡、名東遺跡、大柿遺跡といった徳島の遺跡のほか、智頭枕田遺跡、居徳遺跡も

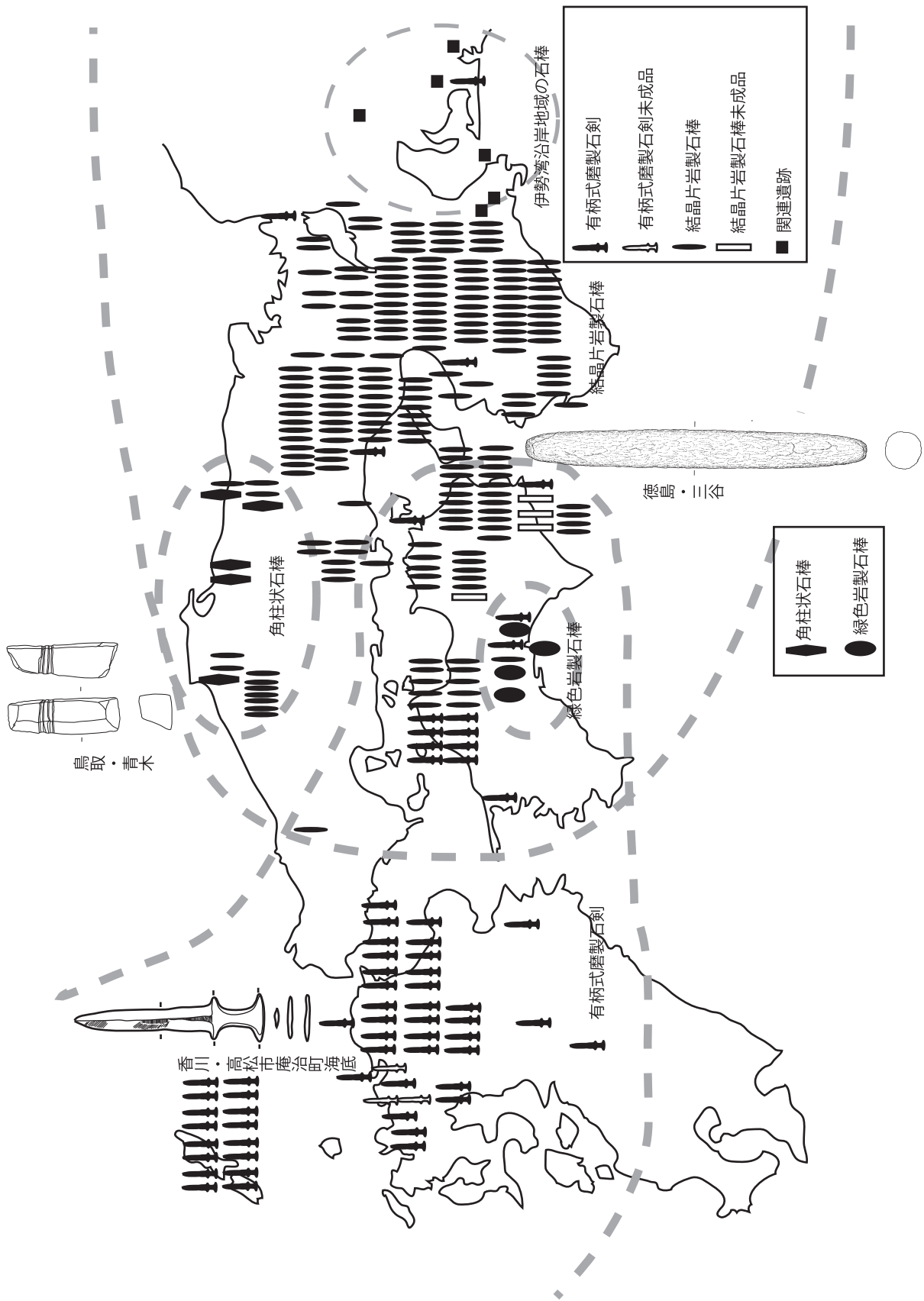


図5 列島西部における縄文／弥生移行期の石製呪術具の分布

この類型に属する可能性が高い。同様のものは、関西地域にも認められる。

C：溝・灌漑用水路をもち、遠賀川式土器を使用する弥生時代初期の遺跡。田村遺跡、善通寺市龍川五条遺跡、神戸市大開遺跡などがこれに相当する。

縄文晩期中葉以前は、基本的には上記Aの遺跡が点在するか、Aに大型石棒をもたない遺跡が結合して地域社会を形成していたものであろう。こうした様相は、縄文晩期後葉にも継続したとみられる。山陰地域の大半はこれに該当するとかんがえられる。

縄文晩期後葉の四国東部地域や東部瀬戸内地域～紀伊水道沿岸地域では、上記Bを中心に複数のAや石棒を持たない遺跡が、大型石棒をもちいた儀礼を通して有機的に結合するような地域社会を想定できる。その典型例は、三谷遺跡を核とする鮎喰川東岸・眉山周辺の遺跡群や長原遺跡周辺である。山陰地域では、智頭枕田遺跡がこれに該当する可能性がある。

一方Cは、A・Bが灌漑水田稲作経営にともなう協業の必要性から集住化することによって形成されたもので、大型石棒は集住化の過程でもち込まれたものか、Bが立地をかえずにCへ移行したものであろう。縄文晩期末～弥生前期初頭は、A—BとCが併存する形で展開していたのではなかろうか。A—B・C併存期、すなわちC成立当初は、A—BとCとの間にも交流はみられたと想定できるので、津島岡大遺跡の井堰出土例のように、大型石棒をもちいた儀礼は継続したとみられる。あるいは、交易によってA—Bよりえた可能性もある。大型石棒の分布圏は、おなじような境遇にあった、A—BまたはA—B・Cどうしの交流、すなわち儀礼の共有を意味するのであろう。

しかしながら、Cは灌漑水田稲作経営にともなう協業によって、日常的に結合しているのであるから、A—Bを成り立たせていた、地域社会を維持するための大型石棒儀礼は、やがて衰退した。また、C内部では大陸系ないし、特有に発達した新たな精神文化が、大型石棒にかわって力を発揮していったものと推察される。たとえば、龍川五条遺跡のように、大型石棒を石剣へ再加工するようなこともみられた。さらにCが灌漑水田稲作経営を、より大規模なものへと推し進める過程で衰退した可能性も高い。

Bが発達せずCの拡大が早かった中四国西部地域（山口、広島や愛媛の一部）に続いて、東部地域においてもCは弥生前期中葉～後葉にかけて拡大し、Bは衰退する。Aは以後も細々と展開したであろうが、Bの衰退によって、大型石棒をもちいることもなくなった。またはCの集住化に加わったものもあつたであろう。ここに、大型石棒は、その役割を終えるのである（註6）。

### (3) 大型石棒・刀剣形石製品からみた縄文晩期後葉の山陰地域

山陰地域においても、縄文晩期後葉の遺跡から大型石棒が出土するケースが多くみられる。上記で検討した、関西～東部瀬戸内地域の資料にもとづく分類と比較するため、以下の3つの類型に分類して検討を加えてみたい。

- a 1：結晶片岩製の石棒が、1～2点出土するケース。大蔭遺跡・原田遺跡・森I遺跡・門遺跡・板屋Ⅲ遺跡などがこれに該当する。関西～東部瀬戸内地域のA型集落に相当しよう。
- a 2：角柱状石棒が1～2点出土するケース。蔵小路西遺跡、青木遺跡、長砂第4遺跡などがこれに該当する。これも関西～東部瀬戸内地域のA型集落に相当すると考えられる。
- b：結晶片岩製の石棒、角柱状石棒など複数型式の石棒が数点以上まとまって出土するケース。智頭枕田遺跡、本高弓ノ木遺跡などがこれに該当しよう。関西～東部瀬戸内地域のB型集落がこれに相当すると考えられる。
- c：関西～東部瀬戸内地域のC型集落がこれに相当する。現時点で山陰地域にはみられないが、潜在的にはその存在を想定しておきたい。

関西～東部瀬戸内地域と比較して、b型集落の数が少ないように見受けられる。しかしこれは、結晶片岩の大量生産がおこなわれた、三谷遺跡などと地理的な隔りがある点も考慮すべきであろう。山陰地域独特の角柱状石棒の展開がみられたところなどからみても、地域社会において、石棒祭祀が重要な役割をもったことは間違いのないといえるだろう。

山陰地域においては、基本的にa1・a2型の集落が地域社会を結びつける核となるような存在であったものとかんがえられる。とくに、結晶片岩製石棒は、中国山地を介して運ばれた貴重なものであり、遠隔地交易に際しての窓口となるような、地域社会における中心的な集落が祭祀に際してもちいたものと考えられよう。すなわち、関西～東部瀬戸内地域におけるB型集落と同様の役割をはたした集落の存在は想定してもよいだろう。

本高弓ノ木遺跡や智頭枕田遺跡は、山陰地域では数少ないb型の集落である。本高弓ノ木遺跡例は、旧河道からの出土であり、集落域や墓域にはまだ未発見の石棒がみられる可能性がある。また、多数の杭を打ち込んだ井堰状の遺構がみつかり、これらの技術は灌漑水田稲作と密接に関わるものとかんがえられる。

智頭枕田遺跡は、関西～東部瀬戸内地域に特徴的な結晶片岩製石棒と、山陰地域に特徴的な角柱状石棒という地域色の異なる石棒と、東方の遠隔地より搬入されたとかんがえられる刀剣形石製品とが集積されている。B・b型集落に特徴的な、多数の石棒が集積される状況にくわえて、時期・地域を跨いだ複数型式の呪術具

が集積される状況は、のちの「埋納」の起源をかんがえる上でも興味深い類例といえるのである。

なお、山陰地域とほぼおなじような様相は、四国南部地域にもみられたと考えられる。地元産石棒が2点出土した仁ノ遺跡はA(a2)型に相当し、結晶片岩製石棒と地元産の緑色岩製石棒がともなう居徳遺跡はB(b)型、遠賀川式土器系集落の田村遺跡はC(c)型に相当するとみて大過あるまい。

#### 4. 石棒祭祀の終焉と青銅器祭祀

大型石棒は、灌漑水田稲作経営が拡大し、地域社会が集住化するとともに、その役割を終える。以後、石棒祭祀に変わる祭祀が展開していくこととなる。近年、石棒祭祀と青銅器祭祀との地域性に共通点のあることが指摘され、祭祀の地域色が、縄文から弥生へと継続する可能性についての言及もみられるようになってきた。

難波洋三氏は、菱環鈕式銅鐸と外縁付鈕I式銅鐸といった、古式の銅鐸(図6-2・3)の分布が、

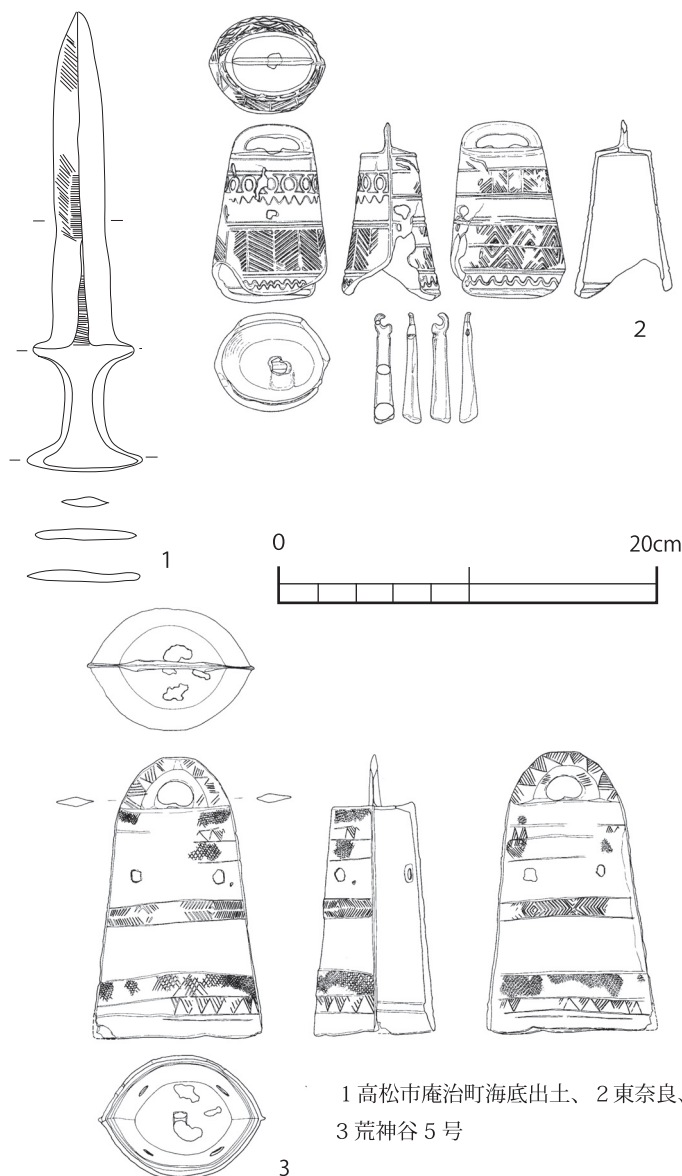


図6 有柄式磨製石剣と銅鐸

1 高松市庵治町海底出土、2 東奈良、  
3 荒神谷5号

特定の中心地に集中するのではなく、すでに東海・北陸西部～中四国東部といった、広域にみられることから、銅鐸祭祀成立以前に、銅鐸祭祀に継承されていくなんらかの共通の祭祀によって、まとまった地域圏をすでに形成していた可能性を指摘している（難波2000）。

筆者は縄文晩期末～弥生前期初頭に展開する結晶片岩製石棒の分布圏が関西～中四国東部に展開することを指摘し、同時代の北部九州～中四国西部に大陸系の祭祀具である有柄式磨製石剣が展開し、列島西部を東西に二分した祭祀具の分布圏がみられることを見出した（中村2004）。また、難波の研究を受けて、これがのちの銅鐸と武器形の青銅製祭器の分布に類似していることを指摘し、この両者の関連性を予察した。本稿でみた、山陰地域における角柱状石棒の分布域と、四国南部地域における緑色岩製石棒の分布域も、この分布圏に含めてとらえることのできるものである。

近年、茨木市東奈良遺跡出土の小銅鐸（図6-2）が、型持ち孔の位置や鈕の断面形態、バリがみられないなどの朝鮮式小銅鐸との類似性から、菱環鈕式銅鐸をさかのぼり最古に位置づけられるという意見がある（森田2002）。さらに、その文様が三田谷遺跡や三谷遺跡にみられるような有文土器や北陸・東海東部にみられる浮線渦巻文土器などの文様と類似している点が指摘されてきている（設楽2009・2013）。菱環鈕式銅鐸の製作が弥生前期末・中期初頭であり、東奈良の小銅鐸がこれをさかのぼる弥生前期中葉の製作と想定できるのであれば、A-B型集落とC型集落の併存が解消される段階とはほぼ一致するのである。すなわち、大型石棒祭祀の終焉と銅鐸祭祀の起源とのあいだには、断絶はみられないこととなるのである。

石棒祭祀の衰退は、灌漑水田稲作経営とこれに関連する協業にともなう集住化であると推測される。集住化によって地域社会は解体し、これを維持する役割をはたしていた石棒も終焉をむかえた。しかしながら地域社会間をむすびつける紐帯は堅持されたものとかんがえられる。結晶片岩製石棒と銅鐸の分布圏が概ね一致する理由はそこにあるとかんがえられる。

やがて、弥生前期末・中期初頭を画期に弥生前期前半に形成された灌漑水田稲作経営を軸とする地域社会は、不安定な堆積環境（洪水による災害）もあって一旦解体する。瀬戸内海沿岸地域では、弥生前期から弥生中期前半へ継続的に拡大発展する集落はあまりみられない。この弥生中期前半期に地域社会をむすびつける祭器として、あらたな機能をはたしていったものが銅鐸ではなかったか。

石棒祭祀は、地域社会の核となるA・B・a・b型集落において執り行われたと考えられる。とくに、縄文晩期後葉になると、B・b型集落において、多くの石棒が集積されることとなる。なかには智頭枕田遺跡のように、新旧型式や複数地域の型式が集められることもあった。その後、集落内でおこなわれていた祭祀は、いつしか集落から分離する。新旧・複数地域の型式の遺物が集落から離れた位置に集積される埋納は、ここに起源するのではなからうか。

## まとめ

本稿では、本州島西部および四国島（中四国）地域における縄文時代精神文化について、石棒を中心に論じてきた。中四国地域の縄文時代精神文化は、大きくみて縄文草創期～中期後葉（縄文前半期）と、石棒や土偶などが一般化し、配石遺構や土器棺墓などの類例が増加する縄文中期末・後期初頭～晩期（縄文後半期）に分けることができよう。

縄文前半期では、玦状耳飾や上福万遺跡、久代東山岩陰遺跡、中ノ坪遺跡などで配石遺構（墓）の展開がみられるものの、基本的に後半期へと継続して展開していくものはあまりみられない。

縄文後半期では、土偶、石棒、玉類、配石遺構、土器棺墓などほかの列島西部地域同様縄文時代の精神文化を代表する文物が揃って展開する。しかし、地域性が顕著であり、とくに土偶は中国地域とくに山陰地域において濃密に分布し、他地域、特に四国地域においてはあまりみられない。土器棺墓は関西地域、東海地域、北陸西部地域のように群集するような類例はみられないが、配石遺構は、山間部を中心に比較的多くみることができる。

中四国地域では、石棒が地域性に関係なくもっとも普遍的に分布する。筆者の関心もあって、石棒を

軸に縄文後晩期の地域社会に関して考察をくわえた。

中四国地域では、縄文中期末・後期初頭～後期前葉に大型石棒を東方より導入する。石材は多様なものもちいられた。石棒は、特定の遺跡から1～2点出土する。これらをA・a型の集落とした。石棒出土遺跡は地域社会の中心的な遺跡で、これに石棒をもたない小規模な遺跡が組み合って地域社会を形成していたとかがえた。

縄文後期中葉～晩期中葉にかけて、中国地域では刀剣形石製品が展開するようになる。一方、四国地域では石棒が継続した。石材は多様であり、1～2点出土する遺跡が多い。縄文中期末・後期初頭～後期前葉同様A・a型の集落を中心とする地域社会がみられた。他方、原田遺跡では、石棒・刀剣形石製品のまとまった出土がみられた。後のB・b型集落の萌芽的な様相をみることができよう。

縄文晩期後葉～縄文／弥生移行期には、ふたたび大型石棒が広く展開した。石棒の出土点数は多く、関西地域も含めると、同時代の列島でもっとも盛行するようになる。四国地域において継続的に展開した大型石棒祭祀が、縄文から弥生へと移行する歴史的背景の下、中四国地域のみならず、列島西部東半の広い地域で受け入れられた。石材は、結晶片岩製のものが、三谷遺跡を中心に多量に生産され、西部地域をのぞくほとんどの地域にもたらされる。山陰地域の角柱状石棒、四国南部地域の緑色岩製石棒といった地域的な展開をみせるものもみられた。また、それまでと異なり、一遺跡から4点以上出土するB・b型の集落がみられるようになる大きな特徴をもつ。石棒祭祀は、これらの遺跡を中心に、地域社会を維持する目的で機能したものと考えた。背景には、北部九州～中四国西部において、いち早く灌漑水田稲作経営を軸とする地域社会が平野部において形成され、有柄式磨製石剣にみられるような大陸系の精神文化が展開しつつあったからである。やがて石棒祭祀は、灌漑水田稲作の導入と大規模化にともなう集住によってその役割を終えることとなったのである。

従来、弥生時代に展開する青銅器祭祀は、農耕にともなう祭祀として縄文時代の祭祀とは一線を画して理解されてきた。近年、縄文晩期末の石棒祭祀盛行地域が、のちの銅鐸分布圏と重なることが指摘されている。山陰地域は弥生時代に多量の青銅器を埋納することで知られている。本稿でも石棒祭祀から青銅器祭祀への移行や、埋納の起源に関しても予察したが、詳細は今後の課題としたい。

## 註

- (1) 以下、個々の遺跡の文献については、主要なものをのぞいて、一部省略している。詳しくは中四国縄文研2011、深田ほか2008などを参照いただきたい。
- (2) より正確には、白雲母の絶対年代測定が必要となる（高須2000）。  
なお、結晶片岩の産地が広域に分布することを理由に、結晶片岩製石器の生産と流通研究を否定する意見を耳にはさむことがある。しかし、考古学は人間が石材をどのように活用するのかを追求するのであって、考古学的事実である未製品の特定遺跡への集中や、その未製品と同じ特定石材の広域分布にいたるまでを否定することはできないであろう。また結晶片岩にも地域性はみられるのであって、今後原産地を推定できる可能性はあるものとかんがえられる。
- (3) 智頭枕田遺跡出土の刀剣形石製品は、関西地域にみられる榎原型石刀ではなく、北関東を中心に中部から北陸にかけて分布する型式で、おもに縄文後期後葉～晩期前葉のものである（後藤1986）。これらの地域では、縄文後期後葉～晩期末にいたるまで継続し、祭祀系遺物を多く出土する遺跡が認められる。これらの製品が、縄文晩期後葉にいたるまで継続的に利用され、それらが浮線土器などともにもたらされたとかがえなければならぬ。
- (4) すでに大下明は、同じような動向が関西地域でもみられることを指摘している（大下2010）。
- (5) 石棒は縄文時代を通じて列島東部に濃密に分布し、列島西部では少なかった。しかし縄文晩期末に限っていえば、関西～中四国東部地域がもっとも濃密に分布する地域となる。
- (6) 近年、秋山浩三（2002ab・2004）・寺前直人（2005・2009・2010）両氏らによって、弥生時代の石棒が注目され、積極的な研究がなされている。たとえば、関西地域などにみられる、八尾市亀井遺跡や和泉市・泉大津市池上曾根遺跡など、沖積平野に立地する弥生前期末以降の比較的大型の集落からも、石棒類が出土することがあって、両氏はこれらを積極的に評価するのである。しかし、秋山の想定される弥生前期後葉に至るまでの凸帯土器や縄文系集落の継続は、今日の土器編年研究の到達点からみても極論に過ぎるであろう。また寺前は、「弥生の石棒」が結晶片岩製に偏らないことや、関西東部すなわち内陸部では、刀剣形石製品がみられることから、縄文晩期後葉の特徴という共通理解である結晶片岩製石棒の展開さえ疑問視する。これなどは、縄文晩期中葉以前の小型石棒と、縄文晩期後葉の大型石棒の年代を、意を尽くして吟味することなく、積分状態のまま比較しているにすぎないだろう。

両氏がとりあげる「弥生の石棒」の多くは、灌漑水田稲作の展開による地形の改変がさかんにおこなわれた弥生集落の営為

によって、立地の重なる縄文後晩期の遺跡が破壊され、混入または再利用されたと想定すべきものである。実際、「弥生の石棒」出土遺跡では、少量の縄文土器が出土しているケースが多い。たとえば、奈良県立橿原考古学研究所調査の大和高田市川西根成柿遺跡では、弥生前期中葉の大型集落から結晶片岩製石棒の出土が認められる。しかし、これに隣接する同遺跡の大和高田市調査地区では、多数の縄文晩期後葉の土器とともに結晶片岩製石棒が出土しているのである。この場合奈良県立橿原考古学研究所調査地区の結晶片岩製石棒は、弥生前期中葉に、灌漑水田稲作を基盤とする集住化と開発に際して縄文晩期後葉の遺跡が破壊されたことを示しているとみるべきであろう。この例のように、「弥生の石棒」とされている資料を検証すると、その相当数が混入ないし再利用として評価すべきものとなるのである。

「弥生石棒論」は、秋山による縄文集落と弥生集落の「共存論」や、寺前による大型石棒と「小型石棒類」の東西差などの仮説を説明するための飛躍がみられるのであって、石棒の出土状況の吟味と、土器編年に対する配慮とはこれらを根本的に支持しないのである。

本論との文脈でかんがえたと、弥生時代の石棒祭祀を議論する前提としては、A・B型集落と遠賀川式土器系すなわちC型集落との有機的な関連性が絶対的な条件となろう。この条件をみたしている弥生集落は、弥生前期前葉までのもので、大開遺跡あたりが下限であるとかんがえられる。この動きは、結晶片岩製石棒の製作・使用遺跡である三谷遺跡の廃絶と近接する庄・蔵本遺跡の灌漑水田経営にともなう拡大をみれば容易にとらえることができるはずである。すなわち石棒祭祀を廃絶した先に大規模灌漑水田経営にともなう集住化が認められるのである。そうして、石棒祭祀が地域社会の維持という本来の意味で機能していた段階および集住化初期段階と、集住化を終えた大規模集落における混入・再利用がみられる段階とは、明確に切り離して議論しなければならない。

## 引用参考文献

- 秋山浩三2002a「弥生開始期以降における石棒類の意味」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』
- 秋山浩三2002b「弥生の石棒」『日本考古学』14
- 秋山浩三2004「土偶・石棒の縄文・弥生移行期における消長と集団対応」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』
- 稲田陽介2008「山陰地方における石棒の基礎的研究」『島根県考古学会誌』25
- 稲田陽介2009「島根地域の打製石器石材利用の様相—山陰地方における縄文時代の石材流通（予察）—」『環瀬戸内地域の打製石器石材利用』中四国縄文研究会
- 内田律雄編1996『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3 門遺跡』島根県教育委員会
- 大下 明2010「大型石棒—近畿地方、東海・北陸地方西部の事例から考える—」『縄文時代の精神文化』関西縄文文化研究会
- 勝浦康守編1997『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会
- 角田徳幸編1998『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5 板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
- 角田徳幸編1999『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6 中原遺跡』島根県教育委員会
- 勝部智明・花田修司編2006『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8 原田遺跡（2）』鳥取県教育委員会
- 木田 真2004『平成13・14年度町内遺跡発掘調査報告書』鳥取県八頭郡智頭町埋蔵文化財調査報告書6
- 木村剛朗1987「中村貝塚」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研
- 後藤信祐1986「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究」上・下『考古学研究』33—3・4
- 小林青樹2000「中国地域（岡山県・広島県）の概要」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』文部省科学研究費報告書
- 酒井雅代・木田 真・濱田竜彦2006『智頭枕田遺跡I』鳥取県八頭郡智頭町埋蔵文化財調査報告書11
- 佐竹 寛・藤方正治・曾我貴行・下村 裕編2001『居徳遺跡群I』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書62
- 佐竹 寛・藤方正治・曾我貴行・下村 裕編2003『居徳遺跡群IV』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書78
- 設楽博己2009「弥生開始期の社会変動—東海・関東地方の場合—」『季刊東北学』19
- 設楽博己2013「東奈良銅鐸の文様をめぐって」『三島弥生文化の黎明—安満遺跡の探求—』高槻市立今城塚古代歴史館
- 清水真一ほか1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青木遺跡発掘調査団
- 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎ほか1976「帝釈寄倉岩陰遺跡の調査」『帝釈遺跡群』亜紀書房
- 下條信行1994「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」『社会科』学研究』28
- 曾我貴行編2004『居徳遺跡群VI』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書91
- 高須 晃2000「三田谷I遺跡より出土した石器石材の岩石学的研究と原産地の推定」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX 三田谷I遺跡Vol.3』島根県教育委員会
- 田畑直彦2000「中国地域（山口県）の概要」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』文部省科学研究費報告書
- 武末純一1982「有柄式石剣」『末廬国』六興出版
- 多田 仁編2009『池の内遺跡2次調査』愛媛県埋蔵文化財調査報告書151
- 田中清美ほか1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II』(助)大阪市文化財協会
- 中四国縄文研究会2011『中四国地方縄文時代の精神文化』
- 泊 強編2001『貞光前田遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書35
- 寺前直人2005「弥生時代における石棒の継続と変質」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』
- 寺前直人2009「武威と社会形成」『弥生時代の考古学6 弥生社会のハードウェア』同成社
- 寺前直人2010『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 鳥谷芳雄・小林青樹・下江健太・岡田健一ほか2000『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX 三田谷I遺跡Vol.3』島根県教育委員会
- 中村 豊1998「稲作のはじまり—吉野川下流域を中心に—」『川と人間—吉野川流域史—』溪水社



- 中村 豊2000a「四国地域（徳島県・香川県・愛媛県・高知県）の概要」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』文部省科学研究費報告書
- 中村 豊2000b「近畿・東部瀬戸内地域における結晶片岩製石棒の生産と流通」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』文部省科学研究費報告書
- 中村 豊2001「近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉—縄文から弥生—」『縄文・弥生移行期の石製呪術具3』文部省科学研究費報告書
- 中村 豊2003「四国地域の石棒・石刀」『立命館大学考古学論集Ⅲ』
- 中村 豊2004「結晶片岩製石棒と有柄式磨製石剣」『季刊考古学』86 雄山閣
- 中村 豊2005「列島西部における石棒の終末—縄文晩期後半における東西交流の一断面—」『縄文時代』16
- 中村 豊2007「縄文—弥生移行期の大型石棒祭祀」『縄文時代の考古学11 心と信仰—宗教的観念と社会秩序—』同成社
- 中村 豊2008「石のまつり—石棒と磨製石剣—」『開館10周年記念特別企画展記念シンポジウム まつりと信仰の謎をさぐる—講演・報告要旨—』徳島市立考古資料館
- 中村 豊2009「石棒を通してみた縄文から弥生への地域社会の変容」『一山 典還暦記念論集 考古学と地域文化』
- 中村 豊2010「東部瀬戸内地域における大型石棒の出土例—晩期後半を中心に—」『縄文人の石神—大形石棒にみる祭儀行為—』国学院大学考古学資料館研究室
- 中村 豊2012「中四国地域における大形石棒」『考古学リーダー20 縄文人の石神—大形石棒にみる祭儀行為—』六一書房
- 中村 豊2013「結晶片岩製石棒の拡散」『農耕社会成立期の山陰地方』山陰考古学研究集会
- 難波洋三2000「石鏡の展開」『シルクロード学叢書』3
- 野崎貴博・光本 順・中村大介ほか2006『津島岡大遺跡17—第23・24次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告22
- 幡中光輔2011a「山陰地域における葬祭空間の成立と展開」『中四国地方縄文時代の精神文化』中四国縄文研究会
- 幡中光輔2011b「山陰地方山間部の縄文遺跡群と地域社会の変容—島根県志津見・尾原地区からの分析—」『島根県考古学会誌』28
- 濱田竜彦2000「中国地域（鳥取県・島根県）の概要」『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』文部省科学研究費報告書
- 濱田竜彦2001「中国地域（鳥取県・島根県）の概要 補遺」『縄文・弥生移行期の石製呪術具3』文部省科学研究費報告書
- 濱田竜彦編2013『一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ 本高弓ノ木遺跡（5区）I』鳥取県教育委員会
- 平木裕子・佐伯純也・濱田竜彦1998『長砂第3・4遺跡』(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書26
- 弘田和司ほか2004『苫田ダム建設に伴う発掘調査 3 久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184
- 藤方正治・曾我貴行編2002『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書69
- 深田 浩2002「中国地方の土偶について」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 下山遺跡(2)』島根県教育委員会
- 深田 浩編2002『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 下山遺跡(2)』島根県教育委員会
- 深田 浩・久保田一郎・稲田陽介2008「島根県の縄文時代祭祀遺物集成」『古代文化研究』16 島根県古代文化センター
- 深田 浩2011「山陰地域の精神文化（遺物）—土偶・石棒・玉類を中心に—」『中四国地方縄文時代の精神文化』中四国縄文研究会
- 間野大丞編1999『蔵小路西遺跡』島根県教育委員会
- 松本岩雄・足立克己編1996『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会
- 宮田健一編2010『大蔭遺跡第1・2・4・6・7・8次発掘調査報告書』島根県鹿足郡津和野町埋蔵文化財調査報告14
- 宮田健一編2012『大蔭遺跡第3・5次発掘調査報告書』島根県鹿足郡津和野町埋蔵文化財調査報告19
- 森田克行2002「最古の銅鐸をめぐって—東奈良銅鐸の型式学的検討—」『究班2 埋蔵文化財研究会25周年記念論文集』
- 柳浦俊一編1994『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2 森遺跡・板屋I遺跡・森脇山遺跡・阿丹谷辻堂跡』島根県教育委員会

## 挿図出典

- 図1 1 角田編1999 2 宮田編2010 3 泊編2001
- 図2 1 勝部・花田編2006 2・3 弘田ほか2004 4 木村1987 5 杉原ほか1967 6 宮田編2010 7・8 酒井ほか2006
- 図3 1 柳浦編1994 2 勝部・花田編2006 3 内田編1996 4・5 鳥谷ほか2000 6 酒井ほか2006 7 木田編2004  
8 宮田編2012 9 角田編1998 10 濱田編2013
- 図4 1 清水ほか1978 2 間野編1999 3 平木ほか1998 4 濱田編2013
- 図5 青木遺跡：清水ほか1978 三谷遺跡：勝浦編1997 高松市庵治町海底：中村実測
- 図6 1 中村実測 2 設楽2013 3 松本・足立編1996（柳浦俊一実測）
- 写真1～写真3 すべて中村撮影



写真1 徳島市三谷遺跡出土結晶片岩製石棒（縄文晩期後葉）



1・2三田谷I、3門、4・5智頭枕田  
6森I、7板屋Ⅲ、8～11原田、12大蔭

写真2 山陰地域出土結晶片岩製石棒（縄文晩期後葉）



1 川入、2 津島岡大、3~5 三谷



6 門田貝塚、7・8 百間川沢田、9 延寿寺跡



10 原田



11 板屋Ⅲ、12 蔵小路西



13 青木



14 長砂第 4



15 居徳



16



17

16・17 大蔭



18~21 智頭枕田



22・23 仁ノ



24 中尾 H



25



26

25・26 久田原

写真 3 中四国地域出土その他の石棒